

後ろ向きの美学—競わない若者たち

進学・フリーター問題考察

檜内 久義

愛知みずほ大学瑞穂高等学校

現代の若者たちは懸命に努力することを「かっこ悪い」とし、敬遠する。それは、努力したにもかかわらず、失敗したときのことを恐れるからである。彼らは、「仮想的有能感」というものにより、自分が他人より優れた者だと思い込んでいる。しかし、その他人とは実体のないバーチャルな存在に過ぎないのであり、実体のある他人とは競い合えないのである。このような若者たちの意識は、社会現象としても見受けられる。大学進学、フリーター問題について、この若者たちの意識がどのように影響を及ぼしているかを考える。

競わない若者たち

2006年、教育心理学者である速水敏彦氏の著した『他人を見下す若者たち』が評判となった。その副題は「自分以外はバカの時代！」という目をひくものであった。そこでは、現代の若者たちは、実際に他人と競い合い、客観的に自他の能力を比較することなく、「仮想的有能感」により他人を見下すことを現代社会の中で生存していく術としていことをはじめとして現代の若者たちの特徴が明確に指摘されていた。それらは現代の若者の心理を考える上で大変示唆に富む指摘であった。また、2007年1月6日付けの中日新聞に2007年に成人式を迎える新成人を対象に時計メーカーのセイコーが実施した意識調査の内容が紹介されていた。それは自分たちの世代を漢字二文字の熟語で表現させたネットアンケート（当てはまる熟語を5つの中から選ばせる方法で実施）の結果であった。それによると、「(いつの間にか差がつき始めている)格差」が25%でトップであった。しかし、注目したいのは2位以下のものであった。紹介すると、割合の高い順に、「(程よい距離を保ちながらつながる)連鎖」24%、「(私は私の道を行く)拡散」19%、「(誰にも負けないオンリーワンを目指す)個性」16%、「(気の合う仲間といつも一緒に)連帯」8%であった。それらの意識は前述の速水敏彦氏の著書でも指摘されているものであり、若者たちを巡る社会現象を考える上でキーワード

となるものである。

本稿では、現代の若者の自分、他人、社会に対する意識を基に、進学、フリーター問題について進路研究の立場から考えて行きたい。

所属する高等学校の2006年度の文化祭の文化講演会で「後ろ向きの美学—競わない若者たち」というタイトルで現代の若者たちの意識について話をした。その内容は長年、高校生たちと触れ合い、進路指導に携わって来た経験を基にしたものであり、タイトル、特に副題の「競わない若者たち」については、全くの実感であった。そのときの考えと、以前、所属していた研究グループにおいて発達心理学の立場から考えたフリーター問題についての見解を基に、なぜ、高校生である彼らは競わないのか、また、その意識がフリーター問題、進学に関しての受験方法等にどのように影響しているのかについて述べてみたい。まずは、進学に対しての現代高校生の意識について見て行く。

大学受験をめぐる問題

学力試験の回避

規制緩和により新設される大学や学部による定員増と18歳人口の減少等を背景として4年制私立大学の4割が定員割れに陥っている。そのため、大学側は、学生確保のための様々な方策を講じている。最近人気のある看護・福祉系や幼児教育系の学部の新設も、そのひとつである。しかし、そ

れも結果的には需要と供給のバランスを欠いた選択であり、根本的な状況の改善どころか反対に自分の首を絞める結果を招きかねない。そのような状況において、大学は、学生獲得競争に勝利するために学力におけるハードルを下げざるを得ない状況にある。具体的には、入試方法の手直しである。まずは、一般学力試験によらない推薦入試、A.O 入試等の導入と、それらの受験機会の増加、また、学力試験においても、受験の機会を増やす等が殆どの私立大学で行われている。今、学力におけるハードルを下げるという表現を用いたが、厳密に言えば、学力を問わない選考方法の導入に頼らざるを得ないということである。なぜ、そのようなことが起こるかという、高校のカリキュラムの問題や受験生たちの能力の低さを必ずしも表さない。そうではなく、大学側が、そのような対応をとるには、受験生である若者たちの意識の変化が大きく関わっていることが原因と考えられる。少なくない数の受験生たちが学力入試のために特別な努力をしていないことと、進学に際し、はじめから学力入試を選択してはいないことが原因と考えられる。現代の受験生の中に合格に向けて切磋琢磨して受験勉強に打ち込む者の割合が減少してきていることが入試方法の変化を齎していると考えられるのである。

その根拠としては、推薦入試等の学力に頼らない入試方法によって入学する学生の割合の増加が挙げられる。日本私立学校振興・共済事業団の調査(2006年7月公表)によると、私立4年制大学では、全入学者に対する推薦入試での入学者の割合が1995年には33%だったが、2006年には45%に増加していることが分かる。全入学者の約半数に及ぶ数値である。因みに私立短期大学では、1995年の58%に対し、2006年は72%であり、増加率は4年制大学と同程度だが、全入学者に対する割合は約7割と非常に高いものである。また、文部科学省の資料(「国公立大学入学者選抜実施状況」)によると、推薦入試を実施している4年制私立大学の数も、1997年には541大学だったのに対して2006年には685大学と大幅に増加している。A.O入試の導入については、ベネッセコーポレーションの調査によると更に著しく、1997年の7大学に比べ、2006年には425大学であった。

これらのデータは、大学側の、一般学力試験実施を前にある程度の学生数を確保したいという気持ちの表れと同時に、受験生たちの学力試験を避ける傾向の増加を表していると考えられる。大学

側の方策は、受験生側の意識の反映であり、受験生の意識に敏感に反応したものである。そして、それらはお互いに相乗効果を生み出していると思われる。

推薦入試に臨む受験生の中には、学力試験にも挑戦する者もいる。その場合、推薦入試は、一種の「保険」である。推薦入試の場合、合格したら必ず、その大学に入学しなければならない「専願」と呼ばれる入試と、合格しても、その権利を放棄することができる「併願」と呼ばれる入試がある。学力試験によって推薦入試で受験した大学とは別の大学、学部挑戦する者は、その「併願」を選択した者である。但し、推薦入試の「併願」受験者が必ずしも学力試験に臨むわけではない。推薦入試のみの受験方法で大学入試に臨む者が、本命の大学は「専願」の推薦入試で受験し、所謂、「滑り止め」である大学には「併願」の推薦入試を選択する機会が少なくないからである。この場合、「併願」が「専願」の「保険」となるのである。本来、推薦入試の性格上、推薦入試で臨む大学に合格したら、そこに入学しなければならないはずなのだが、現状は、そうではない。

更に、推薦入試でも、在籍する高等学校長の推薦が条件となる「学校推薦」や、ある程度の成績基準等を設けている推薦入試の他に、学校長の推薦が得られなかったり、学業成績が思わしくなかったりする場合には、「自己推薦」などと呼ばれる受験方法も存在する。これは、むしろ、学業成績だけにとらわれず、受験生の個性や学問に対する適性、大学への志願理由の確かさ等で可否を判断するA.O入試の受け持つ範疇である。

以上、眺めて来た推薦入試、A.O入試という受験方法の増加や、推薦入試の多様化は、大学側の学生確保に対する苦心の表れと同時に受験生の学力試験回避の傾向を如実に表すものと考えられる。

若者たちの美学

受験生に代表される若者たちは努力を避ける傾向にある。努力は彼らの美学にそぐわないのである。競わないことこそが彼らの美学なのである。速水氏は自著の中で次のように述べている。

日本人は、「努力信仰」を持つということが、しばしば語られてきた。しかし、現代の若者たちは、昔の人たちのように、努力を重視しているとは考えがたい。努力には、どうしても「忍耐」や「我慢」が伴うが、彼ら自身はむしろ、忍耐や我慢をして努力する姿を冷笑

するようになったことは確かであろう。現代の若者たちは熱くなれないのだ。忍耐や我慢は、彼らからすれば「かっこ悪いもの」の代表格なのである。だからといって、彼らは望ましい結果や勝利を望んでいないわけではない。努力なくしてすばらしい結果を手にすることが、最も「かっこいい」と考えている。

(『他人を見下す若者たち』講談社現代新書 2006年 200頁)

受験生が、推薦入試をはじめ学力入試を避ける現象には、速水氏が指摘する、この心理が見られるのではないか。実は、努力がなされないのは、何も学力入試に対してだけではない。推薦入試やA.O入試においても、その現象は見られる。推薦入試やA.O入試では、面接、小論文や作文等が実施される。また、出願の際に、ある程度の文字数が課された志願理由書や自己推薦書、活動記録等を提出しなければならない場合も少なくない。受験生の中には、これらに対しても努力や労苦を避ける場合が多々見受けられるのである。進学校と自称できない高校等の教員なら誰しもが経験していることであろうが、そのような受験生たちの中には入試直前になってから、小論文の書き方を指導して欲しいとか、自分の長所とは何であるかを教師に平気で尋ねたりする者がいるのだ。もちろん、どの高校でも、早い段階から小論文の書き方や、面接指導は行っているのだが、彼らは真剣に取り組んでいないのだ。それ故、3年次になってから、それも入試を目の前に控えた夏休み明けなどに、そのような質問や依頼をして来るのだ。ただ、話は横に反れてしまうが、この問題には、既述の、学生確保には背に腹をかえられない大学側の状況が責任の一端を担っていることは指摘しておかなければならない。実際には、今、紹介したような受験生たちでも合格を手にすることができるのだ。努力なくして合格できてしまい、それが、後輩たちへと申し送りされ、更に受験準備をしない受験生たちを生み出してしまふ悪循環を生むからだ。

では、若者たちは、なぜ努力しないのか。速水氏は次のように述べる。

仮想的有能感を持つ人が、通常の意味での達成動機づけの高い人とは思われない。彼らは人前では自分ではできるはずであることを示そうとする。そして成功した場合には、自分ほとんど努力しなかったのに、結構いい線い

っていると吹聴する。しかし、失敗した場合には、「急に家庭で重大事故がおこった」「体の調子が悪くなった」「そもそも意味のないテストなので勉強しなかった」というように、さまざま口実をあげつらう。努力は諸刃の剣であり、それによって目標を達成させることも可能だが、努力をつぎ込んだのに失敗した場合は、努力しない場合よりも深く傷つくことになる。現代の若者たちは後者の場合をひどく恐れているように見える。(『他人を見下す若者たち』講談社現代新書 2006年 200・201頁)

つまり、努力して望みどおりの結果が得られなかったときの傷の深さを恐れているのだ。若者たちは競わない。なぜなら、真剣に競う場合には、それなりの努力を必要とするし、敗者となった場合には、ひどく傷つき、自分の本当の実力、非力さを目の当たりにしなくてはならなくなるからである。それ故、若者たちは実際には実体を知らない大衆と呼べる存在を仮想的な他者として「みんな」と呼び、馬鹿にする。顔や実力を知っている者とは競わない。比較するときや、自分に優越感を抱くときには、実体のない「みんな」を相手にするのである。こうすれば、自分が傷つくことは永久にない。このことは次に考えるフリーター問題の根幹にも関わる問題である。

本稿の冒頭で、セイコーが新成人に実施したアンケートの結果を紹介したが、新成人たちが自分たちの世代を表す言葉として挙げていた、「(程よい距離を保ちながらつながる)連鎖」、「(私は私の道を行く)拡散」、「(誰にも負けないオンリーワンを目指す)個性」、「(気の合う仲間といつも一緒の)連帯」は全て競争や努力と馴染まないものであり、速水氏の指摘する若者の心理と合致する。彼らの挙げた中でも、「(誰にも負けないオンリーワンを目指す)個性」は、一見、競争や努力を連想させるかも知れないが、それは、ナンバーワンではなくてオンリーワンであり、優劣を基準にしているのではなく、単に自分が他と異なっていることだけを示しているのである。何でも「個性」という一言で済ませてしまえば、優れていようが劣っていようが何ら問題にならないからである。

以上、高校生の受験に対する姿勢の背景にある若者たちの心理について眺めて来たが、それらは、フリーター問題にも大きく関わることになる。次に、フリーター問題に見られる若者の意識について考えて行きたい。

フリーター問題

2004年に、論者が所属していた大学院の発達心理学の授業において様々な分野を専門とする大学院生が博士前期、後期の別もなく参加し、フリーター問題について考える機会があった。そこでは、発達心理学はもとより、社会学、教育学、哲学の分野からの視点を含む多方面からの検討も加えられながら興味深い議論が展開された。少し古いデータや社会状況を基にした報告になるが、その内容に、その後に気づいた見解を交えてフリーター問題と、その背後にある若者の意識について考察する。

フリーターへの扉

フリーターの種類、それになった動機は様々である。まず、フリーターの種類としては、分類する各視点によって次のようなものがある。

①現在の意識面から分類する（労働省 2000年）と、「自己実現型」（フリーターを辞めて定職に就きたいと考えている者のうち、定職に就くための具体的な取り組みをしている者）・「将来不安型」（フリーターを辞めて定職に就きたいと考えている者のうち、定職に就くための具体的な取り組みをしていない者）・「非自発型」（「将来不安型」のうち、正社員として採用されなかったり、正社員として採用される見込みがないと諦めた者）・「フリーター継続型」（フリーターを辞めて定職に就きたいと考えていない者）・「その他型」（以上の4つの型以外のフリーター）の5つがある。

②フリーターである現在の状況を自分のビジョンが見えているかどうか、自分の将来に向けて具体的に行動を起こしているかどうかで分類する（リクルートフロムエー 2000年）と、「暗中模索型」（現在、自分でも何をやりたいのか分からないという状況にある者）・「現状満足型」（現在のフリーター生活に快適さと満足度をかなり感じてしまっている者）・「憧れ・夢見て足踏み型」（やりたいことのイメージはあるが、具体的な手だてを講じていない者）・「トライ&ステップ型」（やりたいことを目指して仕事を辞めた者や暗中模索の時期を経て次なるステップに踏み出した者）の4つがある。

③フリーターとなった契機と当初の意識に着目する（日本労働研究機構 2000年）と、「夢追求型」（特定の職業に対する明確な目標をもっていてアルバイトをしている者・27.8%）・「モラトリアム型」（フリーターとなった当初に、明確な職業展

望を持っていなかった者・39.2%）・「やむを得ず型」（労働市場の悪化や家庭の経済事情、トラブルなどの事情によってフリーターとなった者・33.0%）の3つがある。

④将来の志向を職業・労働形態を軸にどのようなイメージを描いているかという視点で分類する（リクルートフロムエー 2000年）と、「クリエイティブ・アーティスト志向派」（自分の感性と実力で芸術的な仕事をしていこうと志向するタイプ・3.7%）・「知的・技能的フリーランス志向派」（知的資格や技能を身に付けて、将来は独立しようと考えているタイプ・2.8%）・「企業内自己実現派」（自分のやりたい仕事のイメージははっきりあるが、企業に属することで自分のやりたいことを実現しようと考えているタイプ・14.9%）・「いざとなれば寿派」（将来は結婚して主婦になることを考えるタイプ・5.6%）・「いざとなれば家業継承派」（フリーランスとして成功できればと考えているが、親の事業を継ぐ道もあるため余裕があるタイプ・36.1%）・「ボヘミアンフリーター派」（将来のことはあまり考えず、今の延長線上で良いと考えるタイプ・1.0%）・「とにかく就社安定希望派」（できるだけ早くどこかに就職して安定した生活をしたと考えるタイプ・35.0%）の7つがある。

それぞれの分類において、所謂「フリーター問題」として採り上げられるべきタイプは①で見ると、「将来不安型」・「非自発型」・「フリーター継続型」、②では、「暗中模索型」・「現状満足型」・「憧れ・夢見て足踏み型」であろう。それら以外のタイプ、すなわち、①における「自己実現型」や②における「トライ&ステップ型」に属している人たちは、フリーターから脱して定職に就くための具体的な取り組みをしていたり、目指すべく明確な目標を持ち、それに向けて具体的な取り組みをし始めたりしている人たちであるからである。③や④において「フリーター問題」として採り上げられるものは「モラトリアム型」・「やむを得ず型」や「ボヘミアンフリーター派」のタイプであろう。それら3つのタイプに属する人たちは十分な職業意識を持っておらず、消極的な選択によりフリーターへの扉を開いた者たちと考えられるからである。しかし、実は、以上において「フリーター問題」のタイプとして挙げなかった分類に属するフリーターたちも、目標や動機の内容ではなく、その身分、すなわち、フリーターなるがゆえに「フリーター問題」となり得る危険性を孕んでいるのである。

問題予備軍

フリーターとなる動機や、フリーターとして働く意識の種類に関係なく、フリーターであるという、そのことだけが「フリーター問題」となり得るということについて述べていく。

「フリーターへの扉」で採り上げたフリーターのタイプ別分類において「フリーター問題」から除外したタイプは①・②においては「自己実現型」・「トライ&ステップ型」、③・④では「夢追求型」・「クリエイティブ・アーティスト志向派」・「知的・技能的フリーランス志向派」・「企業内自己実現派」・「いざとなれば寿派」・「いざとなれば家業継承派」・「とにかく就社安定希望派」である。そのうちの「自己実現型」は、フリーターを辞めて定職に就くことを希望しており、その目標達成のために具体的な取り組みをしている人たちであり、「フリーター問題」予備軍からは除くことができよう。また、「企業内自己実現派」は自分のやりたいことと仕事を分けて考えることができる、すなわち、定職に就くことを希望している、または定職に就くことを拒んでいないというところから、後で挙げるタイプと比較すれば「予備軍」から除外できるであろう。「とにかく就社安定希望派」は就労に対する意識の持ち方に多少問題があり、就職活動における取り組み方に多分に不安がある。しかし、そのタイプの人たちは、「企業内自己実現派」と同じように定職に就くことを一応目指しており、あくまでもフリーターにとどまるというような頑なさがなく、就労に対して十分に柔軟であるという点から「予備軍」から除外したい。「いざとなれば寿派」・「いざとなれば家業継承派」は職業意識や、就労における自己実現においては問題を孕んでいることは否めないが、フリーター以外の選択肢も受け容れる柔軟さと定職に就く、もしくは家庭に入るという、ある意味安定した「受け皿」が用意されているという点から「予備軍」から除外できるであろう。

すなわち、本稿で問題として採り上げるべきフリーターのタイプは、自分の目指す目標、「夢」というもの、理想の自分像以外受け容れないという柔軟さを欠いた意識を持ち続ける人たちである。具体的には、「トライ&ステップ型」・「夢追求型」・「クリエイティブ・アーティスト志向派」・「知的・技能的フリーランス志向派」に属するタイプのフリーターたちである。それらのタイプの人たちはある意味、明確な意思を持っている人たちである。中には目標に向かって具体的に何らかのアクションを起こし、努力している人たちもいるだろう。

その姿勢自体に問題はない。それらが「フリーター問題」に含まれるのは、その自らが設定した目標、「夢」を手に入れられないときなのである。ある意味、積極的にフリーターを選択したタイプの人たちも、設定した目標、または抱いた「夢」が、達成できなかつたり、実現できなかつたりした場合、妥協して他の道を歩み出さない限り、一生、フリーターであり続けることになる。ここに、上記で、フリーターとなる動機や、フリーターとして働く意識の種類に関係なく、フリーターであるという、そのことだけが「フリーター問題」となり得ると述べた所以がある。

次に、「予備軍」に潜む危険性を生み出すフリーターの意識を、発達段階とキャリア発達の観点を交えて述べる。

「成長・空想・探索」期

「フリーター」という言葉は「生まれた」ときには現在のように好ましくない響きを持ってはいなかった。むしろ、その言葉が誕生したころの日本の職業環境の「型」にとらわれずに自由な発想をもって行動的に活動する高い教養と才能を持ち合わせた一部のエリートを指し示す言葉であった。背景にはアメリカの資本主義、自由主義の根底にある個人主義があったと言われる。かつての日本の「風土」には存在しなかったイデオロギーによって生まれた就労形態である。しかし、時代の移り変わりによって、その意味も変容を来した。現在では「フリーター」を容認する人は限られている。フリーターの是非については様々な意見がある。しかし、現状では、まだ積極的に支持する者は少ない。なぜならば、フリーターにならないための職業観の育成や進路選択についての教育が今まで十分になされて来たか大きな疑問符が打たれるからである。また、ごく近年になってから注目を浴びだした問題なので、まだ十分な議論と検討がなされていないからでもある。しかし、現代においてフリーター問題は切実なものになりつつある。十分な議論がされるには、それ相応のデータがなければならぬ。フリーター問題を論ずる現状は、まさに本格的にデータ収集と調査に取り組んでいるところにある。その中で徐々に明らかになりつつあるものもある。そのひとつがフリーターを構成する人たちの大部分を占める 10 代後半から 20 代の若者の意識である。

シャインのキャリア開発サイクルで見てみると、0 歳から 30 歳までは次のような発達段階に含まれている。①成長・空想・探索 (0 歳～21 歳)、

②仕事世界へのエントリー（16歳～25歳）、③基礎訓練（16歳～25歳）、④キャリア初期の正社員資格（17歳～30歳）、⑤正社員資格・キャリア中期（25歳以降）。また、それぞれの段階には各課題が存在している。この中で注目したい段階は①の「成長・空想・探索」の段階である。

この段階は0歳から21歳までと年齢の幅が極めて大きい、この段階を金井篤子氏は、「まず、第一段階は成長・空想・探索期である。この段階の課題は職業人となるための準備段階である。自分自身の欲求や興味、能力や才能を開発し、職業観や職業興味を持つとともに、適切な教育を選択し、その教育を受ける。アルバイト体験などの試行的職業体験を通じて、自己の適性を知る。」（後藤宗理・大野木裕明編『現代のエスプリ 427』至文堂 2003年 60頁「キャリア発達の視点から」）段階と述べている。

なぜ、この段階を特に採り上げるかという、それが、次のキャリア開発サイクルにつながる、無くてはならない基底となるからである。「サイクル」であるから「基底」というよりも始点と表現した方が適切かもしれないが、その段階を抜きにしては次の段階へは進めないのである。そして、この段階に、まさしく、フリーターをはじめて選択する時期の若者が含まれるからである。①の段階の後、仕事に参入することになる。すなわち、求職活動を行い、現実的な選択のもとに初職につく②の段階や、仕事の現実を知り、仕事を覚えたり、組織のルールを学んだりする③の段階というように職場において重要な初期の段階が①の後に続いていくのである。

それぞれの段階もスーパーのライフ・キャリアから見て、その後のキャリアに無くてはならないものであるが、その原初としての役割を①は持っている。この時期における人たちが、その段階に課された課題をこなしていくかということが、その後の人生において重要な問題となるのである。

「変わりたくない」意識

シャインの「成長・空想・探索」期は、エリクソンの自我発達における「乳児期」から「青年期」、もしくは「前青年期」にあてはまる時期でもある。職業選択を視野において、このエリクソンの自我発達の段階を見てみると、「遊戯期」では特に自分の身近で目に触れる職業に憧れを持ったりする。そして、「ごっこ」という遊戯の中で疑似体験したりする。そのときの職業意識は、当然ながら、「かっこいい」や「なってみたい・やってみたい」な

どの単純な意識から生じるもので、自分の適性に即しているといった高度な意識ではない。それが「学齢期」を過ぎて、「青年期」・「前成人期」に至ると、社会的には「仲間集団」を超えた「外集団」の環境に身を置くようになり、「競争」を体験し、その体験を通して、「協力の相手」を見つけ出したりし、自我を確立していく段階に移行する。そこでの職業意識は「ごっこ」であってはならない。「かっこいい」、「なってみたい・やってみたい」という基準、すなわち、「憧れ」ではなく、自己の適性を踏まえた明確な職業意識が持たれなければならない。そこまでの職業意識が育成されてなければならないのである。当然、「ごっこ」ではなく、競争をはじめ、挫折、劣等感等を実際に体験する発達時期にある若者たちは、その決してやさしくはない現実に揉まれ、削られ、自己を陶冶していくことになる。その中で自らの能力と限界を知ることになる。そして、さらなる上昇を目指し研鑽を積んだり、本来目指していたものとは異なる進路へ進むという方向転換の道を選択したりするのである。では、フリーターを選択した若者たちに見られる意識はどうだろう。若松養亮氏は、20歳を超えて学校を卒業しても実家で親と同居することが容認されるようになったという若者以外の外的要因を指摘するなど、フリーター問題を若者だけの問題にしないということを訴えている一方で、若者自信の職業に対する意識の甘さを指摘している。そこでは、販売部数や視聴率を第一と考えるマスコミが発信する偏った情報や、そこから生じた一面だけのイメージだけで職業を考えたり、「自分は変わりたくない、けれど他人を変えたい（影響を及ぼしたい）」等の意識が強いことが指摘されている（後藤宗理・大野木裕明編『現代のエスプリ 427』至文堂 2003年 127—138頁「進路選択の現状」）。好ましい（というより自分に都合のよい）イメージのみで職業を選択し、たとえ望み通りに就職できたとしても、イメージ以外の面、すなわち、自分にとって好ましくない部分を見せられたときに辛抱できずに、数年、あるいは数ヶ月という短い期間で退職してしまう事態が生じることになる。また、「自分は変わりたくない、けれど他人を変えたい（影響を及ぼしたい）」という意識は若松氏も指摘するように自らをより高次元に向上させる点等、必ずしも悪い面ばかりがあるわけではないが、それを重視し過ぎることには長所をはるかに凌ぐ大きな欠点が存在している（「進路選択の現状」）。その意識の中では常に自分は中心人物、主人公でなければならないのである。すなわち、

ドラマの中の主人公のように必ず「おいしい」役どころでなくてはならないのである。そのような意識が自らの職業観、就労観のほとんど大部分を支配している場合、その意識の持ち主は傷つくこと、辱められることには耐性を持ち得ない。ゆえに厳しい現実社会の中で挫折や屈辱を味わうことを避けなければならない。すなわち、自身の真価が問われるような場面に自らを置くことができないのである。そのため、定職に就けない、もしくは就けても間もなく離職する等の事態を招くことになる。まさしく、大学入試に関する箇所で紹介した速水氏の指摘する若者意識が見られるのである。

最近、「ひきこもり」という言葉が度々聞かれるようになり、その問題が注目されつつある。この「ひきこもり」の当事者の意識の中にも「自分は変わりたくない、けれど他人を変えたい（影響を及ぼしたい）」という意識が強く働いているのではないだろうか。傷つくことを恐れるがあまり、外部との接触を断つ、しかし、自己を外部に発信して、誰かに認められたいという願望は捨てきれない。そのような「ひきこもり」の心情とフリーターの一部の心情は比較的近いところにあるのではないだろうか。就職する等、社会に出れば当然、他との関係が生じる。協力関係もあるが、競争関係も避けられない。その中では人は達成感や充実感を味わう反面、ときに挫折を経験する。そのことに対する耐性が培われていないと社会生活をまともに送ることはできないのである。

フリーター問題の盲点

フリーターは社会に認められる存在になりつつある。本稿のフリーター問題に関する主なデータや資料は、2004年当時の確かな景気回復の傾向も見られない不安に満ちた不況下の就職難を背景にしている。しかし、2007年の現在でも、景気は緩やかではあるが、回復傾向にあるものの、企業は正社員採用に関しては未だ慎重になっており、そのような雇用状況を背景として、また、親たちが社会に独立すべき年齢の子どもの同居と養育を容認するという家庭環境を背景として、フリーターの存在は避けられないものとして、あるいは積極的な生き方のひとつとしてさえ認められる傾向にある。

問題は、フリーターを選択する人たちが十分に社会人としての自覚を持っているかということである。すなわち、自我の確立ができているか、キャリア発達から見て、それ相応の段階として成熟

しているかということである。もし、未成熟なままであれば、本稿の「フリーターへの扉」、「問題予備軍」のところで述べたように、一見、問題ないと言われるフリーターでも、それが、フリーターであるがゆえに問題になってしまうのである。

甘い自己や社会の認識を基底とした、自らに限界のあることを認めず、妥協しない生き方を続けるという生き方、自らを変えることは望まず、他人に影響力を持つ「一目置かれるような」存在であり続けようとする生き方の延長線上にあるフリーターであれば、否定すべき存在であると言わざるを得ない。

フリーターを選択した人たちの中で、自己防衛手段としてフリーターの存在を美化している者が少なくないのではないかと。また、フリーター経験がなく、その危うさと悲しみを知らず、伝統的な日本文化の「風土」的社會背景を否定し、個人主義を強調し過ぎた外来のイデオロギーに眼を奪われるかのごとくフリーターを美化する一部の知識層の言説に影響を受けて多くの人たちがフリーターを必要以上に容認しているのではないだろうか。

フリーターの存在を認めることは必要である。しかし、あくまでも豊かな社会生活を営むべく成熟した人格者であらねばならない。そのための方策、学校、社会をも含む教育が十分なされなければならない。価値観があまりにも多様な現代社会において、その社会に見合った職業教育、進路選択についての教育がなされて来なかった、または、なされては来ていたが、現代社会の急速な変化に追いついて来られなかった現状を真摯に見つめ直していかなければならないだろう。

「親の背中」

「親の背中を見る」ということが、親の懸命に働く姿を見て、自らもそれに倣い、その仕事を通じた社会貢献の中で、また、その生業に支えられた家庭において自己充実を図り、アイデンティティを見出すという生き方が「浪花節」扱いにされ、親のように仕事人間で仕事中心に生きて行く存在を憐れんだり、滑稽に思ったりするというのが現代の潮流であるならば、真剣な職業教育や情緒育成も期待できないだろう。速水氏の指摘するように、努力することが「かっこ悪い」とする若者たちには、「親の背中」もそのように見えているのかも知れない。しかし、そこには、「俺の背中を見る」という親の存在がないことも影響しているのではないかと。発達段階において、十分独立していける年代の子どもたちに自ら親の脛を「かじら

せて」いる親の存在についても憂慮しなくてはならないだろう。

責任の所在

現代の若者たちは懸命に努力したにもかかわらず、敗者となったり、望みが叶わなかったりすることを極端に恐れる。挫折に対する耐性に乏しく、立ち直る勇気が持てないからである。冒頭で紹介した通り、セイコーが新成人に対してのアンケートで、「(いつの間にか差がつき始めている) 格差」が自分たちの世代を表す熟語の1位であった。「格差」・「勝ち組・負け組」という言葉は、最近よく耳にする言葉である。「いつの間にか差がついた」と感じる若者は、気づいたときには、「負け組」になっているのだ。「格差」や「負け組」が存在する以上、「勝ち組」も存在するのだが、「負け組」となっている若者たちは努力して「勝ち組」に這い上がる努力は敢えてしないのである。彼らにはじめから努力は存在しない。だからこそ、「いつの間にか」と感じるのである。彼らが競うのはネット上で匿名として競える相手だったり、漠然とした大衆である「みんな」だったりする顔や実体の知れない相手なのである。ネット上の相手や漠然とした「みんな」が相手であれば、都合が悪くなれば、こちらからいつでも関係を断つことが可能である。「相方向」的な関係だと、そうはいかない。一方的な関係だからこそ、それが可能となるのだ。それゆえ、いつも彼らの自己分析は絶対的、主体的ということになる。他人との客観的な比較はあり得ない。自分は絶対的基準において「最高」な存在であり、現状は不遇だったり、「ぱっと」していなくとも、「いずれ」、望み通りになれる「可能性」や「能力」、すなわち、計り知れない潜在能力という「仮想的有能感」を持っているのだ。そして、それが心の拠り所となっているのだ。しかし、それはあくまでも仮想、バーチャルなものであり、それを頼りに実社会の中で生き抜くことはできない。

以上、進学とフリーター問題を対象として若者の意識について述べて来た。しかし、それは、彼らを取り囲む環境を作り出した大人たちの責任であることを認識しなければならない。そのような視点から、学校教育、特に進路学習、そして、家庭における教育の在り方について真剣に考えて行かなければならない。

参考文献

- 速水敏彦著『他人を見下す若者たち』講談社現代新書
2006年
後藤宗理・大野木裕明編『現代のエスプリ 427』至文堂
2003年